

現代英米演劇の研究

日比野 啓

大学院生の頃は『英語年鑑』の回顧と展望欄、とくに英米演劇の項を読むと不思議な気持ちになった。回顧や展望が必要なほど日本における英米演劇研究に深みや拡がりがあるとは思えなかったからだ。英語圏演劇を専門とし日本語を主要言語として用いる研究者の数はそれほど多くないし、その中でそれぞれがよくも悪くも勝手にやっているのだから、一定の方向性を見出し、今後の道筋をつけるのは困難だ。無手勝流は明治以来日本の人文学全体の特徴かもしれないが、それでも歴史学のようなハード・アカデミズムであれば、いくつかの学派ごとに研究手法や目的意識の共有がなされているだろうから、回顧と展望をおこなう意義はあるかもしれない。けれど文学研究は一人一人読み方も違うし学派といえるような学派もない。「実質的意義」よりも、その権威主義的身振りが重要なのではないか、そんなふうには考えていた。

留学から帰国後、多少「業界」ズレするようになると、『英語年鑑』の回顧と展望欄はその言語遂行的効果ゆえに機能するのだ、ということに気づいた。回顧と展望ができるぐらい研究者の層は分厚く、今後の発展が見込まれる、と繰り返し唱えることで、それを現実のものにすること。「想像の共同体」としての研究者集団に実体を与え、自分たちはともに日本の英語圏文学・演劇の研究を推進しているのだという意識を高めること。皮肉でも何でもなく、そうやって私たちは自分たちの存在意義を日々確認していかなければならないのだ、ということがわかってきた。

今回から英米演劇の欄を担当することになって、私は『英語年鑑』の回顧と展望欄がこれまで果たしてきたそのような役割を引き継ぐつもりでいる。いやむしろ、昨今の人文学とりわけ文学研究をめぐる情勢を鑑みるに、これまで以上に信念や思い込みをもって英米演劇研究が重要であり、いま行われている研究が面白い、ということを喧伝しなくてはいけないだろう。とはいえ、この後退戦を戦うにあたって私たちは身の程を弁えなくてはならない。少なからぬ人々が文学部などなくてもよいと思っている今日び、「内輪受け」する研究成果のみを顕彰し日本の英語圏演劇研究の未来はバラ色であるかのような妄言を垂れ流せば、私たち研究者のコミュニティは結束を深められるかもしれぬが世間からは孤立していく。「回顧と展望」の行為遂行的効果は、文学・演劇研究がいかに社会との回路を開いていくか、私たちの用いる言語が日常言語とはかけ離れているように見えていかにそれと地続きであるか、ということを示すために用いられなければならない。学部学生が卒論や学期末レポートのために仕方なく手にとった論文や書籍が、せせこましい最初の問題設定から一步も外に出ず、ごく当

たり前のことを結論として述べていたら、私たちは身近な味方を失うことになる。専門家としてごく狭い範囲のことを扱いながらも、文脈や知識を必ずしも共有しない読者まで巻き込むだけの思考の深みを備えた研究にこそ光が当てられなければならない。

2014年度に出版された、桑原文子『オーガスト・ウィルソン：アメリカの黒人シェイクスピア』（白水社）と谷岡健彦『現代イギリス演劇断章——舞台上聞いた小粋な台詞 36』（カモミール社）は、この後退戦を戦うのにふさわしい二冊である。両者ともジャーナリスティックな切り口を採用しているため間口は広く、研究者でなくても「入りやすい」かわりに奥が深い。誰にでもわかる平易な言葉を用いながら、読み進めていくうちに思いもよらぬ遠方に読者を連れ出してくれる。長年対象に愛情を持って接してきた著者たちならではの芸当だろうし、もしかすると著者たちがともに俳人であることも関係しているのかもしれない。

『ピアノ・レッスン』をはじめとするウィルソン作品の翻訳のほか、二十年近くにわたりウィルソンについての論文を発表してきた桑原氏が研究成果の集大成として刊行した『オーガスト・ウィルソン』は、本国でもまだ書かれていない本格的な評伝であり、主要作品についての手際よくまとめられた解説であるとともに、ウィルソンが関わってきた／関わってきた合衆国の演劇や社会全体についての素描でもある。公立劇場における芝居作りの実際や晩年のロバート・ブルスティンとの論争の経緯など、ウィルソンの業績を彼がおかれてきた文脈の中で理解することのできる日本語の著作が刊行されたことの意義は強調してもしすぎることはないだろう。学生にとってみれば絶好の解説書となるだろうし、ウィルソンを研究対象とする専門家にとっては、ここで述べられている以上のことをどう論じるかという基準器の役割を果たす。

谷岡氏の『現代イギリス演劇断章』は研究書ではなく一般向けに書かれた随想だが、扱う範囲はノエル・カワードから1980年生まれのティム・ブライスまで多岐にわたり、個々の作品についての言及は短いながら行き届いたものになっている。私のようなすれたシアターゴアーにはそれほど「小粋」だと感じられない台詞もいくつか引用されていたが、粗筋を語りつつ作品の魅力を的確にまとめてみせる氏の筆致は、そんな私ですらも、未読既読を問わず戯曲を手に取りたい、上演を見にいきたいと思わせてくれる巧妙なものだった。演劇を社会に対して開かれたものにしたい、という谷岡氏の願いが伝わってくるような佳品である。

ところで私の担当範囲からは外れるが、シェイクスピア研究では勝山貴之『英国地図製作とシェイクスピア演劇』（英宝社）と大谷伴子『マーガレット・オブ・ヨークの「世紀の結婚」——英国史劇とブルゴーニュ公国』（春風社）の二冊が上梓されている。両者ともシェイクスピア作品に当時のリアル・ポリティクスがいかにか反映していたかを膨大な歴史史料にあたって実証的に示しており、著者たちの献身的な努力に頭が下がる思いをするとともに、この分野においては例外的に研究者の層の厚みといえるべ

回顧と展望

きものが存在していることを改めて思い知らされる。ただ、歴史家が史料をもとに歴史を書き換えていくのに対し、文学研究者は既存の歴史(観)を前提として史料を集め、作品と突き合わせて「答え合わせ」をする——歴史上の定説が作品においても妥当であることを証明する——だけで、歴史の新たな展望はもちろんのこと、作品の新たな魅力を探り当てることにもなかなかつながらない、という文学研究者が歴史を扱うときに必ず直面する問題はいずれにおいてもそれほど解決されてはいなかった。中野春夫氏が御自身の担当欄で専門家の立場から論評されているので甚だ僭越ではあるが、同様の悩みを抱える人間として大いに考えさせられたゆえに、付言する次第である。

さて論文では、金田迪子「サラ・ケイン 4.48 Psychosis (1999)における『狂気』の読解」(『英語圏研究』第10号・お茶の水女子大学大学院英文学会)がよかった。金田氏はこの戯曲の「特殊な形式を積極的に評価しよう」として「戯曲と上演の新しい関係を提示するような革新的作品」として読む傾向が近年見受けられることをまず述べる。その上でそうした傾向に抗い、この戯曲にネルヴァル『オーレリア』、C・S・ルイス『銀のいす』など過去の文学テキストの反映を見てとり、作品における狂気の描写が文学における伝統的テーマとして間テキスト性を獲得していることを示す。なるほど、上演を前提として書かれた戯曲を解釈する以上、上演にまつわる種々の条件や状況を考慮する必要があるという最近しばしばなされる主張はもっともだし、演劇研究の成果を研究者だけでなく広く作り手や観客に享受してもらうには、具体的な上演の場を想定して議論を行ったほうがよいだろう。とはいえ、過去の実際の上演をもとに分析を進める手法はテキストの理解を深めるより演出家の意図などテキスト外の文脈の解読になりがちだし、研究者が自ら架空の上演を想定して作品を分析するものは、往々にして素人くさい演劇観を振り回すだけの滑稽な結論で終わる。4.48 Psychosis論の現況については詳らかにしないが、金田氏が「そのような形式的特徴を戯曲と上演の関係といった実演的な関係からのみ評価することは、必ずしも適切ではないように思われる」と控え目に述べているのは、この戯曲の分析についても同様の事情が生じていることを予想させる。「ぼくのかんがえたさいきょうの4.48 Psychosisのじょうえん」を開陳する愚を犯すよりも、潔くテキスト内に閉じこもり、テキストの汲めども尽くせぬ豊饒さと向き合った金田氏の論考のほうが、かえって今後の上演の様々な可能性を開くことになったのではないか。

実際の上演が葬り去ってしまった読みの可能性を再度掘り起こすという意味で金田氏と同様に安易な上演分析の流れに異を唱えるのは坂井隆“Some Attempts to ‘Fail’ at Theatre: Radical Poorness in the Later Plays of Tennessee Williams”(*The Journal of the American Literature Society of Japan*, No. 13 [2014])だ。坂井氏は「東京のホテルのパーにて」ほか最晩年の「失敗作」三作品におけるウィリアムズが(グロトフスキの宣言「貧しい演劇に向けて」の英語圏における紹介[1967年]とほぼ

同時期か、わずかに先んずるかたちで)「貧しい演劇」を目指す革命的な企てを試みていたと評価する。経済的に困窮していること、技術的に未熟であること、そして作品のミニマリスト的傾向の三者が「貧しさ」という言葉に集約されて論じられることもあって、ウィリアムズの「失敗」の試みがいかなる形態の上演につながるかは不明のままだが、大いに刺激を受けた。

劇作家を一人とりあげて作品解題の色合いが強い論文を掲載する、という点で、三十年近く演劇研究と社会とを架橋する試みを続けてきた『アメリカ演劇』。その25号「オーガスト・ウィルソン特集 II」が2014年4月に、26号「ユージン・オニール特集 III」が2015年3月に刊行された。収録論文の多くは昨今流行の上演分析を視野に入れておらず、作家中心主義や戯曲中心主義を2015年現在においてどう正当化していくか、という問題意識にも欠けているように見えるが、アメリカ演劇に関心のある大学生や一般人にとっては取っつきやすい。いずれの論文にも、専門家としての高い矜持が伺えるが、紙面の都合上論文題名とその筆者名だけを記す。桑原文子「ピッツバーグ・サイクルにおける都市再開発の影響——『二本の列車が走ってる』を中心に」(前掲書に再録)、貴志雅之「アフリカ系アメリカ人共同体、人種の遺産継承の政治学——『大洋の宝石』から『ラジオ・ゴルフ』へ」、山本秀行「『ラジオ・ゴルフ』におけるアフリカ系アメリカ人のマスキュリニティ——その再構築に向けてのヴィジョン」、川村亜樹「オーガスト・ウィルソンとヒップホップ——ライオンとしてのキング・ヘドリー二世」、岡本淳子「オーガスト・ウィルソン劇が語り継ぐアフリカの価値——音楽、信仰、血の継承」[以上25号]、貴志雅之「ユージン・オニール、反逆の演劇の軌跡——詩人、所有者、憑かれた者たちの弁証法」、竹島達也「劇作家ユージン・オニールの「ニューヨーク物語」——『蜘蛛の巣』、『毛猿』、『ヒューイ』に見る敗残者たちの世界」、大森裕二「花咲き緑溢れる大地への憧憬——『偉大なる神ブラウン』」、天野貴史「移動と労働——ユージン・オニールの初期海洋劇」、森本道孝「ユージン・オニール劇における終わりなき『終わり』の探究」、佐藤里野「ブルータス・ジョーンズの死と『銀の弾丸』——黒人の魔法に溶ける貨幣・労働・自己」[以上26号]。

この他目につく活動としては、井上治氏が「ソートン・ワイルダーの3つの短い劇——彼の他作品との比較から考察する」(『關大英文學』March 2015)をはじめとしてワイルダー作品についての四本の論文を発表されている。同じく『關大英文學』には古木圭子「ブロンソン・ハワードの『シェナンドア』とジェームズ・A・ハーンの『グリフィス・ダベンポート』」にみる南北戦争と劇的手法の関係」も掲載されている。

数冊刊行された英語圏戯曲の翻訳では、モーリス・パニッチ『ご臨終』(彩流社)をとくに挙げたい。訳者吉原豊司によるカナダ現代戯曲選シリーズの三年ぶりの新刊。パニッチは現代カナダの代表的劇作家の一人で、日本でも2014年11月新国立劇場でノゾエ征爾演出によって本作が上演されるなど、現場での知名度は高い(それはひと

回顧と展望

えに、80年代から文字通り孤軍奮闘して現代カナダ戯曲の翻訳を発表してこられ、連名主宰の一人であるメイプルリーフ・シアターのウェブサイトでは翻訳済未刊行作品のリストを並べている吉原氏のおかげなのだが)。一方、パニッチ作品の研究、いやそれどころか、きちんとした紹介も研究者の側ができてきていないのは残念だ。

最後にお約束だが、万一調査の不備があり目を通せなかった英語圏演劇についての論文・書籍が当該年度にあれば、ご海容を乞うとともに今後の勉強のためご教示いただければありがたいと思います。

(成蹊大学准教授)